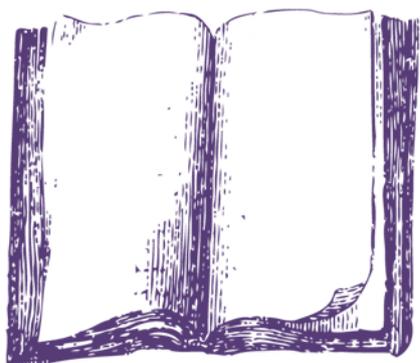


好事家への警告



—A Warning to the Curious—



好事家への警告

イギリスの東海岸にある場所——読者に考えて頂きたいのは、シーバロウだ。

そこは今も、少年時代にいた筆者の記憶にあるものと、ひどくちがってはいない。沼地が南方へかけて、堀で切断され、“莫大な遺産”〔デイツケンズの小説。村の鍛冶屋の甥、ピップの自叙伝。〕のはじめの章を思い出させる。平坦な野っ原は北方に延びて、ヒース〔石楠科の灌木〕の茂りの中に、呑みこまれている。ヒースばかりでない。樅もみの森、そして特に内地産の、はりえにしだも茂っている。

ながい臨海地と街。その後方には、石造りの広大な教会堂があり、大きくて堅牢な西欧風の塔をそびえさせ、六つの鐘の慇々たる音をひびかせる。

筆者は八月の暑い日曜日に鳴るこの鐘の音を、実によく記憶している。その時、筆者たちの連中は、白い埃っぽい坂道を、教会堂を目ざして、そろりそろりと登ってゆくのであった。教会堂は、短かくて急な傾斜面の頂にあるのだ。鐘はこんな暑い日には、鈍い、板でもうつような響きを発するのだが、空気がやわらかければ、またそれだけ澄んで鳴りわたるのだった。

鉄道は、この同じ道に沿って、遠くの小さな終点へ走り下っていた。軽快な、白い風車ふうしゃが、ちょうど駅へ出ようとするところにあつた。それでもう一つの風車は、町の南端にある低い砂礫の浜にちかいところに、そしてまだもう一つが、北方の高地たかみにあつた。そこにはスレート葺きの屋根をかぶつた、陽気な赤煉瓦のコテージがあつた。……だが、どうして筆者はこれら平凡なこまかな風物を描写をして、読者を煩わすのか？ 事實は、筆者がシーバロウについて書きはじめると、

鉛筆の先に、これらの風物が群がってくるのである。筆者はたしかに紙に書きつけるべき当然のものを斟酌したつもりである。だが、筆者は怠慢だった。筆者はまだ、言葉で描写する仕事を、充分果してはいない。

海と町から歩み去って、停車場を過ぎると、道は右方に曲折する。それは砂の多い道で鉄道線路に並行し、なお歩を進めると、いくらか高い丘にのぼることになる。左手（今北へ向けてあるいているとして）にはヒースが生い茂り、右手（海に向った側）には、もみ 樅の老樹が帯のように連らなる。みな風に傷み、いた てっぺんはこんもりして、海辺の老樹らしい傾斜をもっている。読者が汽車からスカイライン 空際線を眺めると、これらの樹々は、すぐさま諸君に、風のひどい海岸に近かづきつつあることを、知らせるだろう。―で、このちいさな丘の頂上からは、これらの樅の樹が、海の方へズーツと走っている。丘の隆起線がその方へ延

びているからだ。隆起線の端は、いい工合な広さの高地たかみになっていて、荒草のはえた平坦な野っ原を見おろし、そこも樅の茂りを冠かぶっている。暖かな春の日、ここに腰をおろして、青い海や、白い風車や、赤いコッテージや、輝やかな緑草や、教会堂の塔や、そして南の方にある遠い円砲塔を眺めることは、はなはだ快適である。

前にも言ったように、筆者がはじめシーバロウを知ったのは少年時代だった。で、ずいぶん年数を隔てているため、筆者のその頃の見解はずっと近頃とはちがっている。でもなおその見解は、筆者の胸にとどまっている。だからここに取りあげて言う、その見解についてのどんな話も、筆者には興味あるものである。

ここに記述する事件は、一つの、こうした話なのである。それはシーバロウからずっと遠くはなれた場所で、そしてまったく偶然にも、或る人が語った話なのである。この人は、みずから進んで、こんなに

心の底まで秘密をうちあけてくれるまでに、筆者を信じてくれたのである。

私はあの地方全体のごことは、多少とも知っているんです（と、彼は話しはじめた）。春になると、私はゴルフをするため、かなり規則正しく、シーバロウへゆくことにきめていました。大抵は“熊^{ベア}”〔旅館の名〕に、一人の友達とーヘンリー・ロングというのだが、たぶん知っておいでだろう（この言葉に対して、筆者は、『すこしばかり。』と答えた）ー宿泊しました。そして私たちは、いつも居間をともにし、実にたのしかったです。この友達が死んで以来、私は、もうそこへ行く気はなくなりました。そして私は、二人が最後に出かけた時に起った、あの特異な事件以来、ともかくあすこへ行ったというおぼえはありません。

一九××年の四月でした。私たちはあすこへ出かけたのです。が、偶然、旅館にはわれわれよりほかに、ほとんど客がありませんでした。だから、普通の客間はみな実際ガラあきでしたが、もつと驚いたのは、昼食後、私たちの居間のドアがスツとあき、一人の若い男が、いきなり首をのぞきこましましたことでした。

私たちはこの男を注視しました。なんだか兎のような感じの、血色のわるい人物―薄い髪の毛と、キヨロンとした目と―だが、不愉快な人物ではなかったのです。

『ごめんなさい。―こゝは客間ですか?』と、その男が言った時、私たちはムツと怒りはしませんでした。『ええ、そうです。』と、ロングだったか私だったか―どっちでもいいことですが―答えました。『どうぞ、おはいりなさい。』『え、はいってもいいですか?』と、彼は救われたように言いました。無論彼が、仲間をほしがっていたのは、明

白でした。そして、見たところものの理窟もわかる類の人物—自分の全家族の来歴なんかを、くどくど話すような連中ではない人物—だったので、私たちは、彼に、まあらくにしておいでなさいと勧めました。

『あなたは、ほかの部屋々々が、なんだかガラランとしているので、驚いたんじゃないですか。』と、私が言いました。ええ、と彼はうなずきました。だがそれは、私たち二人にとっては実にありがた過ぎることです、といったようなことを話して、私は笑いました。こうした会話がすむと、彼は持っていた書物を、読むようなふりをしました。ロングはトランプのペーシエンス遊びをし、私は手紙を書いています。た。

二三分たつと、この男は、なんだかもじもじそわそわしていることが、自然私にわかって来ました。で、私は書くことをやめ、振り向いて、彼を話に誘いこみました。

どんな話をしたか忘れましたが、なにかしやべったあと、彼はかなりこつちを信頼するようになりました。『あなたは私をひどく変な奴だとお思いでしょうな（こんなふうには彼は口を切りました）。ですがほんとのところは、私は或る打撃シヨックをうけたのです。』

そこで私は或る元気をつけるお酒を勧め、いっしょに飲みました。なにか用があったか、話を断ち切るように給仕ウエーターがはいって来ました。

（ドアが開いた時、この若い男は、飛びあがりでもするように、びくっとしたようでした）。が、給仕が去ってしばらくすると、彼はまた、不安な様子に戻りました。このあたりでは彼は誰も知っていないのでした。そして偶然私たちと知るようになったのでした（事實は、町にすこしの知人があったのですが）。彼は、もし気にさわらないなら、ほんとうに助言をしていただきたいと言いました。無論私たちは、『是非。』とか『どっつしまして。』とか言いました。ロングはトランプを押

しやりました。そして、二人は、からだを落ちつけて、どんな事に彼が苦しんでいるのか、聞き耳を立てました。

『それは、一週間以上も前に起ったことです。』と、彼は口を切りました。『ええ、私がフロストンへーほんの五六マイルも先ですが一教会堂を見物するため、自転車を走らせた時です。その建築は大変興味のあるものでした。その廊下ポーチの一つは、壁龕ニッチや楯で飾られた美しいものでした。私はそれを写真にとりました。そこへ墓地を掃除していた爺さんがやって来て、会堂の中を見物したいのかと訊きました。ええと答えると、爺さんは鍵をとり出して私を内部うちらに入れてくれました。内部は大したものではなかったです。が、私は、小ぢんまりした結構な会堂で、しかもあなたの掃除が行き届いていると言いました。“だが、ここで一番すばらしいのは廊下ポーチですね。”と、一丁つ言いながら、そとへ出て、ちようどその廊下のところへ来ますと、爺さんは私に向

って言いしました。“ああ、そうでがさ。この廊下は結構なものでがさ。ところで旦那、あすこにある武器の紋章が、どうした意味か御存じかな？”―その紋章は、三つの王冠をもっているのです。私は紋章学については、かくべつ知ってはいませんが、そうですね、あれは東アングリア王国〔古代英国の一国〕の、古い武器だと思われれますねということは答えられました。

“お言葉の通りでがさ。”と、爺さんは言いました。“で、あの上にある三つの王冠の意味を御存じですかい？”私は、それが有名だということは、充分承知しているが、それについて聞いたことは、今思いつけないと答えました。爺さんは言いました。“ではね。あなたは研究家ではありやしようが、御存じないと思うことをお話ししましょうかね。あの三つの尊い王冠は、ゲルマン人の来襲を防ぐ力があるために、この海岸の近くの地中に、埋められたもんでがさ。―ああ、こう

言っても、あなたはお信じなさるまいがね。だが、まったくのこと、もしあれが、奴等の一人に対しても保護されていたなら、あの王冠は、今でもあすこにあつた筈でがさ。ゲルマン人奴等は、ここへ何度となくやって来やした。思うままにね。船でやって来て、男となく女となく子供となく、ベッドの中で殺しつちまいやがったんです。まあ、私の話は、ほんとですよ。ほんとですとも。お信じくださらぬなら、牧師さんにでもきいてごらんなさい。あすこにおいでなすつた牧師さんにね。”

見まわすと、徑こみちをあるいて来る牧師さんがありました。気むずかしげに見える老人でした。私が信頼の挨拶をしかけるかしかけないかに、牧師さんはひどくブンブンして、言葉の腰を折りました。牧師さんは言いました。“いったいなにをしているんだね？ジヨン「爺さんの名」。ーいや、今日は。あなたはこの小さな教会堂をこらんだつたのです

か？”そこで私はちよつと話をしかけると、牧師さんはおだやかに
りましたが、彼はまた爺さんに、なにをしているのだと訊きました。

“ええ、なんでもないことですが。わたしはただこのお方に、あの
尊い王冠のことを、あなた様におたずねなさるがいいと、申している
ところなんでな。”

“ああ、そうかい。”と牧師さんは私に向いて、“実際妙なことです。
そうじゃありませんか？だが、あなたは古い話に興味をもっておいで
かな？え？”

“ええ、しつかり、たつぷりおもちでさ。”と、爺さんは言いました。
“このお方は、あなた様のおっしゃることなら、お信じになりますよ。
だって、あなたは御自身ウィリアム・アージャーを知っておいでます
からな。あの父親も子もな。”

そこで私は、ひと言、^{こと}ぜひその話をお伺いしたいと口を挿みました。

そして間もなく、私は牧師さんといっしよに村の通りをあるいていました。牧師は行き会う教区民へ軽く声をかけ、そして住居へ着きました。彼は私を書斎につれて行きました。道すがら牧師さんは、私が実際に、民俗伝説の例に知的な興味を持っており、まったく普通の漫遊者ではないことを、認めてくれました。で、牧師さんはよろこんで話してくれました。そこで聞かされた特殊の伝説は、以前印刷に附そうとして成功しなかった事を、むしろ私の方で驚いたほどのものでした。

牧師さんの話はこうです。「この地方には、あの三つの神聖な王冠に対する信仰が、ずっとあったのです。昔の人達はこの王冠が、デーン人〔古代北方から英国に侵入した種族。〕や、フランス人や、ゲルマン人等の侵入を防ぐために、この海岸の近くの、別々の場所に埋められたのだと言っていたのです。そして言い伝えによると、この三つのうちの一つは、ずっと以前に掘り出されてしまい、もう一つは海

水の浸蝕のために行方知れずになり、残る一つが侵入者等を防ぐ靈験を、なお現わしつづけていると言うのです。で、もしあなたがこの地方の普通の案内書か歴史をお読みだったら、あなたは一六八七年に、一つの王冠が、熔^とき毀^{こぼ}たれたということを、御記憶でしょう。その王冠は東アングル人「低ドイツ民族で他国に移住したもの。」の王、レツドワルドの王冠で、レンドルシヤムというところで発掘されたといわれているのですが、ああ、なんたることか！それは正規に記録され写生されもしないうちに、熔^とき毀^{こぼ}たのでした。レンドルシヤムはこの海岸にはありません。だがそんなに遠いところでもありません。そして私は、人々が発掘されたと言ってるのは、この王冠だと信じているのです。ところで、場所なんか聞きたくもないでしょうが、南方に、或るサクソン王「昔、ドイツの北部に住んでいた種族。」の王宮があった。それは今では海中に沈んでいると思うが、どうですか？そこに

第二の王冠があったと、私は推定するのです。そして以上二つのほかに、言い伝えでは、第三のものは地中に埋もれているのです。”

“その第二の王冠は、どこにあると言い伝えているのですか？” 無論私は訊きました。“ええ、言い伝えてはいるのだが、どこにあるとは言わないのです。” そして牧師さんのこう答えた態度は、私にこれ以上の質問をするだけの勇気を起させないのでした。で、質問の代りに、私は、ちよつと気を変えて、言いました。“あの爺さんは、あなたがウィリアム・アージャーという人物を知っておいでだと言いましたが、それはどうしたわけですかね。なにか王冠に関係でもありそうな口ぶりでしたが。”

“いかにも、それはもう一つの妙な話です。”と、牧師さんは言いました。“このアージャー一族―それはこの地方では、大した旧家です。だが私は、この一族が果して上流社会の人だったか、それとも大富豪

だったか、知ることはできませんが―このアージャー一族の分れは、あの残った最後の王冠の守護者だったと、言っています。老ナタニエル・アージャーとかいった人物は、この一族で私が知った最初の人でした―私はついこの近所で生れ、育ったのでした。―そして、その人は、たしかに一八七〇年の戦争中、戦場で野営していました。ウィリアムという息子も、この南アフリカ戦争中、父と同じ野営をしていました。若いウィリアムは、かなり近頃死去しましたが、そこに最も近い田舎家に寓居していました。私は疑いもなく彼の死を急がせたのでした。というのは、野曝のびくしと夜間歩哨のため、彼は肺病になったからでした。彼は一族の分れの最後の人でした。その最後の人だという考えは、彼には恐ろしい悲しみでした。でもどうすることもできませんでした。彼になによりも近い親身しんみな人々は、その植民地〔南アフリカ。〕にいました。私はウィリアムについての手紙を、その人々に出して、あな

た方一族に対する至急の用事があるから、来てくれるようにと懇願しましたが、返事はありませんでした。こうして第三の王冠も―もしそれがそこにあるとしたら―今は一人の守護者もなくなったのです。”

以上が牧師さんのお話なのでした。私がこの話にどんなに興味をもったかは、御想像にまかせます。私が牧師さんの家を辞去した時、なによりも考えたことは、その王冠が埋められていると思われる場所を、どうしたら突きとめることができるかということでした。私はまあかまわずに置くがいいと考えました。

だが、そこに宿命とっていいものがありました。それは、私が自転車に乗って、もとの道を教会堂の墓地を過ぎた時、ウィリアム・ア―ジャーと名をしるした、かなり新らしい一つの墓が、ふと目についたことなものでした。無論私は自転車からおりて、墓の上の文字を読みました。“一九××年、シーバロウに於て死す。享年二十八歳。”とし

るしてありました。たしかにそうでした。もし正しい根拠というものに、ほんのすこし思慮のある研究心があったら、すくなくとも私は、その地点のごく近くに、その田舎家を発見したことでしょう。ですが私は、自分の研究の手がかりにする正しい根拠とはなにかということに、まるで見当が付きませんでした。ところが、またそこに宿命がありました。その宿命は、私を、その帰途にある、あの骨董屋―御存じでしょう―に導きました。私は店頭で、そこにある五六の古本をひっくりかえして見ました。そして、お話しするのもなんですが、その一冊は、一七四〇年頃の祈祷書で、それにしてみごとな装釘でした。―いや、すぐ行って、それを持って参りましょう。私の部屋にありませんから。』

こう長い話を切って、彼は、なんだかあたふたと部屋を出て行きました。私たち二人が、ほかの話題に変えるひまもなく、彼はすぐさま

息せき戻って来て、飛頁フライリーフ〔本の前後にある白紙の頁。〕を開いたまま、本を渡しました。そこには震えた手蹟でこんな詩が書いてありました。

ナタニエル・アージャーはわが名にして、

イングラントはわが郷土なり。

シーバロウはわが住所にして、

基督はわが救いなり。

われ死して葬むられ、

わが骨すべて朽ちにし時、

われの全く忘れ去られし時、

神よ願わくはわれをみそなわせたまへ。

この詩は、一七五四年の日附になっていました。そこにはアージャー一家の名が沢山記入されていました。ナタニエル、フレデリック、ウィリアムといった工合に。そして一九××年のウィリアムの名で終つ

ていました。

若い男は言葉をつづけました。

『どうです。誰だつてこの本を見たら、極上の掘り出し物だと言つてしよう。私もそう思いました。が、今では逆です。無論私は骨董屋に、ウィリアム・アージャーのことを尋ねました。そしていい事には、彼はウィリアムのことを思い出してくれました。ウィリアムはこの北の野っ原の田舎家に住んでいて、そこで死んだというのです。これは私には、いい手がかりをつけてくれました。私はどの家がそれだか知りませんでした。そのあたりには、割合に大きな田舎家が、唯一軒あつただけです。

つぎに私の仕事は、このあたりの人達と、知り合いになることでした。で、そのつもりで私はすぐ散歩に出ました。一匹の犬が、この仕事をしてくれました。その犬は猛烈に私へ喰つてかかったので、村

の人々は駆け出し、犬を打ちのけなければなりませんでした。そして当然私に詫びましたが、それがきっかけで、われわれは言葉をかわしました。私はいきなりアージャーという名を持ち出しました。そしてウイリアムを知っているか、或は知っているなにかを考えるといった風ふりをしました。すると一人の婦人が、あんなに若くて死ぬなんて、どんなにウイリアムには悲しいことだったでしょうと言いました。そして寒い晩に戸外にいたことが死の原因だったと、確言しました。すかさず私は、「ウイリアムは夜、海上を漕ぎ出しはしなかったですか？」と訊くと、婦人は、「いいえ、あすこにある樹の生えた塚の上へ、いつも行かれましたよ。」と答えました。―すぐさま私は、その丘へ行きましました。

私はこうした塚を発掘することにかけては、多少経験があります。私は下部地方で沢山塚を発掘したことがあります。だがそれは所有者

の許可を得て、白昼公然と、人夫の助けでやったことです。こんどの塚で私は、鍬を入れる前に、非常に注意して計画をたてました。塚を横切って掘り立てることは不可能でした。縦もみの老木が生えているので、邪魔な木の根があるだろうと知ったのです。だが、土は非常に軽く、砂っぽく、自由でした。そこには兎の穴―或は、或る種のトンネルにはひろげられるほどの穴がありました。合間にホテルへ出入りすることは、だんだん面倒になりました。で、私は、発掘の方法を思いついた時、手助けしてくれる人々に、ひと晩の間、専念にやって見ると言いました。だから私は、そこにひと晩いたのです。私はひとりでトンネルを掘りました。私がどんなにしてトンネルに支柱ささえをつけたか、また掘って後埋め立てたかという、くわしい話は、お退屈だからやめます。しかし、話の大事な点は、王冠を手に入れたということです。』

いうまでもなく、私たちは二人とも、驚きと好奇の叫びをあげまし

た。私個人としては、久しい以前から、レンドルシヤムの王冠の発見について、且つその結果が、屢々悲しむべき運命に陥ったという話を知っていました。誰だつてアングロ・サキソン〔英人の血統。〕の王冠といったものを、今まで見た者はなかった筈です。―すくなくとも、昔にもなかったのです。だが、この若者は、すっかり後悔している目で、私たちをジツと見つめました。そして言いました。

『ええ、手に入れたのです。そして、どうにも困っているのは、私が、どうしたらその王冠をもとのところに返させるか、見当のつかないことです。』

『返えすつて?』私は叫びました。『君は、このイギリスで、嘗て聞かれたこともない、最大の驚嘆すべき発見をしたのですよ。無論それは、ロンドン塔の宝物館へ持参すべきですね。なにが君の困っていることですか?もし君が、塚のある土地の所有主とか、発掘物とか、そう

したいろんなことを考慮しているのなら、僕たちは断乎として君を助けぬきましょう。誰だって、こうした場合に、裁判沙汰のなんのと、馬鹿騒ぎしようとする者はありませんよ。』

たぶん私たちは、これ以上に言いました。が、若者がしたことは、両手で顔を蔽い、こうつぶやいただけでした。――『どうしたら王冠を返せるか、見当がつかない。』

とうとう、ロングが言いました。『失敬な奴だと思はれましょうが、許して頂いて、あなたが王冠を手に入れたのは、まったくほんとうのことですか？』

私も自分で、これと同じことを問いたかったのです。どうにもこの話は、よくよく考えてみても、狂人の夢としか思えないのです。だが、私は、この哀れな若者の感情を傷けそうなことは、敢えて口にしませんでした。

しかし彼は、ロングの言葉を、十分おだやかに受けました。―実は、絶望のための沈静とも言われましょう。彼は立ちあがって言いました。『ええ、そうです。嘘ではありません。私はあれをここに、私の部屋に、鞆にしめこんで、持っているのです。なんなら、部屋へおいでて、ごらんください。この部屋へ持って来る気にはなりません。』

私たちは機会を逸しようとはしませんでした。彼について行きませんでした。彼の部屋は、つい二三番目の先でした。旅館の靴磨きが、廊下に出してある靴を集めていました―いや、そうだと私たちは思ったのですが、これは後で考えると、たしかではなかったのです。

若者―その名はパクストンというのでした―は、前よりも嫌に震える様子で、急いで部屋にはいり、私たちを手招きし、明^{あか}り窓に向き、ドアを入念にしめました。それから彼は旅行鞆の錠をあけ、なにかくるんであるような、きれいなハンカチの束^{たば}を出し、ベッドの上へのせ

て、それを解きほぐしました。

私は今、実際のアングロ・サキソンの王冠を、この目で見たと、言うことができます。

それは銀製でーレンドルシヤムの王冠は、常に銀製だったと言い伝えられています。幾つかの宝玉がちりばめられていました。大部分は古風な凹彫インタリオ宝玉と浮彫カミオ宝玉でした。そしてむしろ素朴なーほとんど粗雑とっていい細工でした。事実王冠は、貨幣の面おもてや写本の中などで見る、ああした王冠に似ていました。理窟なしにそれは、九世紀以後のものとは考えられません。私は、たいへんな興味を感じ、無論手にとってそれをひっくりかえして見たいと思いましたが、パクストーンは遮りました。

『さわっっちゃいけません。私がやります。』と、彼は王冠を取りあげ、グルグル方向を変えながら、残る隈なく私たちに検分させてくれま

した。『充分』らんにになりましたか？』とおしまいになり、「こう言ったので、私たちがうなずきますと、彼はハンカチで王冠をくるみ、鞆に納めて鍵をかけ、無言のまま立ちあがって、私たちへ顔をむけました。

『僕たちの部屋へ帰りましょう。』ロングは言いました。『そして、どんなことが悩みの種か、話して頂きたいですな。』

パクストンは感謝しましたが、『さきにおいでになりますか。見に――海岸が晴れているかどうかを見に？』

この言葉は、べつに、合点のいかぬものではありませんでした。というのは、結局私たちの態度は、べつに猜疑的でなかったからで、しかも旅館は、前にも言ったように、実際ガラあきだったからです。

でも、私たちは、うすうすある事を感知しはじめました――それがなんだか、はっきり言うことはできないが――とにかく神経過敏というやつは、感染しやすいものです。

そこで、私たちは部屋を出たのですが、ドアを開けて、まずそとへ目をやると、一つの影、或は影以上のものが―音もなく―廊下に踏み出そうとしている私たちの前から一方へ、スーツと通って行ったような気がしました（私もロングも、二人ともそう感じたのです）。

『さあ、よし。』

こう私たちはパクストンにささやいて―なに気ない調子でささやいて―彼の左右につき添い、私たちの居間に戻りました。

居間にはいると、私は、今見た類もない宝物のため、しばらくはぼんやりするだろうと、覚悟していました。が、パクストンが度はずれに恐ろしげな様子をしているのを見て、私は彼がなにか言い出すまで、そのままにして置きました。

『どうすべきでしょうか？』これが、パクストンのはじめの言葉でした。ロングは、彼がこう戸惑いしているのは、無理もないと考え（二

れは後に、うちあけてくれたのです。ましたが、

『なぜあの塚のある土地の所有者を探さないのです。その人に知らせて—』

『おお！そんなこと！』パクストンは、遮二無二声をあげましたが、『ごめんなさい。あなたがたは実に御親切です。でも、私は、あれをもとの場所に返えすと言ったじゃありませんか。そして私は夜あすこへ行こうとは思いません。といって昼間行くわけにも参りません。だって、恐らくあなたがたは、事実をおわかりなさらないのです。—よろしい。では事実を申しあげましょう。私は、この事実に関係して以来、一人で居たことはいないのです。』

私は、このパクストンの言葉を聞いて、それにかなりばかばかしい解釈を、胸にうかべかけたのでした。だがロングは、私の目を捕らえ、私を制しながら、

『僕は、わかると考えますね、たぶん。しかし君がどんな立場にいるのか、もすこし明瞭に言ってくれませんか？—そうすれば君も気が軽くなりはしませんか。』

そこでこの事実の全貌が、曝露されることになりました。パクストンは、チロリと私たちを見て、もつと傍に来るようにと手招きし、そして低声で話しはじめました。私たちは、無論一心に耳傾けました。そしてそのあとで、お互いに意見を交換しました。この顛末は私が書き取っておいたので、パクストンのいったほとんど一言一句そのままだと信ずるのです。

彼の話はこうでした。—

『この事は、私が第一回の試掘をした時からじまったのです。そして繰り返えし繰り返えし、私を追っ払ったのでした。試掘にかかる、いつも誰か—一人の男—が、もみ樅の樹のそばに佇んでいるのでした。

これは真つ昼間なのでしたよ。その男は決して私の前方には居ませんでした。私はいつも彼を左か右か、目尻で認めました。そして彼に振り向いて直視すると、そこには姿がないのでした。―私はずいぶん長い間、地びたにゴロリと寝ころんで、注意して観察しましたが、誰もそこに居ないことを確かめると、すぐ起きあがってまた発掘をはじめました。そうすると、もう彼はそこに居たのです。その上彼は、なにか或る事をほのめかすような風ふうを見せたのでした。それはこうなんです。私がホテルの部屋に戻ると、あの骨董屋で買った祈祷書が、どこに置こうと、いつもテーブルの上に取り出され、あのアージャー家の名の書いてある飛頁フライリーフのところがひらかれ、閉じないように私の剃刀かみそりをその上に横にしてあるのでした。で、私はとうとう、それを鞆に入れるのをやめたのでした。

私はあの男が、鞆をあけることはできはしないと信じます。またな

にかそれ以上の事が起る筈はなかったと信じます。おわかりでしょう。彼はフワフワと弱々しい男です。だが、やはり私は彼とまともに向き合おうとは思いません。そこで、私は塚にトンネルをつくっておりましたが、無論うまくいきませんでした。そしてもし私が気を張っていなかったら、私は一切仕事を放棄して、逃げ出したことでしょう。

私が掘りつづけている間、始終私の背中を、誰かがひっ搔いているような感じがしました。私はずっとそれが、ただ土の落ちて来るためだと思っていました。だが、私が王冠のありかに近かづくにつれて、その考えはまちがっていたのでした。そして、私がいよいよ王冠を突きとめ、その縁ふちに指をかけて引き出した時、なんともいえぬ泣き声が、うしろから聞えました。―おお、その淋しげな悲しげな声！しかも恐ろしげに威嚇する調子もまじっているのです。発見のよろこびは、そこなわれ―たちまち消え失せてしまいました。もし私がこんな大馬鹿

でなかったら、私は王冠をもとに戻して、棄てて帰った筈でした。だが、私はそうしなかったのです。

それからさきも、実に恐ろしかったのですが、私は頃合いにホテルへ帰るには、まだたっぷり時間があつたので、まず私はトンネルをふさぎ、掘った跡をかくしにかかりました。その間もずっと、彼は私の仕事に邪魔だてをしました。―或はあなた方に、彼の姿が見えるかも知れない。見えないかも知れない。それは彼の思うままなのです。彼はそこにいます。だが、彼はあなた方の目を蔽う或る力をもっているのです。

まあ、それはどうでも、私は日が出るまでの長い間、塚のそばを立ち去りませんでした。それからシーバロウ行きの連絡停車場ジャンクションへ駆け込み、汽車で帰えるつもりでした。やがてすこしあかるくなりましたが、このさきどうすればいいか、私にはわかりませんでした。道には垣根

や、はりえにしだの茂りや、公園の柵がつづいていました。これが一種の潜伏場所にもなるわけです。私は一秒だって落ついた気持ではありませんでした。やがて、私は、働らきに出かける人たちに出くわしはじめました。彼等はみな、ひどくふしぎそうに、私を振り返りませんでした。彼等はこんなに朝早く人を見かけたことで、驚いたらしいのでした。だが私はそうだとばかりは考えませんでした。今もそうだとはいまいません。というのは、彼等の視線は、正しく私にそそがれているのではなかったからです。ええ、汽車に乗る時の、赤帽ポーターだつてそうでした。しかも、駅夫は、私が客車にはいったあと、ドアを開けたのです。―誰もいないのに、まるで、誰かほかの客を乗せるために開けるように、ね。―おお、それは私の妄想ではないことを、信じて頂けるでしょう。』と、パクストンは、気のない笑いを漏らしましたが、『だから、たとえ私が王冠を、もとの場所にもどしても、あの男は私

を許さないでしょう。そう言えます。ほんとうに、二週間も前までは、私は幸福な人間だったのですが！』——彼は、グタリと椅子によって、シクシク泣き出したのでした。

私たちは言うべき言葉を知りませんでした。なんとかこの若者を救ってやらねばならないと感じました。で、そうするには——実にただ一事——もし彼が王冠をもとの場所に返えす気持であるなら、助力してやろうと言いました。この話を聞いた以上、こうすることが正しいと言わねばなりません。もしこうした恐るべき結果が、彼の身の上に生じたとするなら、この王冠には、王冠元来の観念——むかしこの海岸の侵入者を防いだという不可思議な力のなにかが、真実そこに残っているのではないでしょうか？すくなくともこれが私の感情で、ロングもまたそうだったと思うのです。

パクストンは、とにかく、私たちの勧告をよろこんで受け容れまし

た。いつ私たちは着手しようか？時間は夜の十時半近くでした。旅館の人達に怪しまれないよう、うまく口実をつけて、こんなにおそく散歩に出ることができましようか？

私たちは窓からのぞいて見ました。空には満月―復活パースカル・ムーンの月が輝いていました。ロングは旅館の靴磨きをひきとめて、うまくまるめ込もうと試みました。

彼は靴磨きに、これから散歩に出るが、あまり時間はとらないつもりだと言い、もし興に乗じてすこし長く外でぶらついたら、寝ずに待ちうけてくれるお前に、決して損はかけないと言いました。私たちはこの旅館のいい常客であり、ひどい面倒をかけたこともなく、また雇人たちにおきまり以下のチップもやったこともなかったのです。だから靴磨きは、うまうまとまるめ込まれて、海岸へ出してくれました。後に聞いたことですが、彼はずっと私たちを見送っていたのだそうで

す。

パクストーンは、腕に大きな外套を抱えていました。その下に、王冠をくるんでいたのでした。

私たちは、このふしぎな使命が、どんなに多く困難を伴っているものであるかを考える暇もなく、すぐさま出かけなければなりません。で、私はこの点を、ごく手短かではあるが、特に話して置きました。というのは、実際、計画をたてるなり実行に移すという、火急のやり方でしたから。

『最も近い道は、あの丘をのぼって、教会の墓地を通りぬけることです。』とー私たちが旅館の前にちよつと佇んで、前方を見あげ見おろした時、パクストーンは言いました。あたりには人っ子一人いませんでしたーまったく人っ子一人。季節はずれのシーバロウは、実に閑静な場所なのでした。

『あの田舎家のそばの、堀づたいに行くのはいけませんよ。犬がいますから。』とー私が、まっすぐ進んで二つの野っ原を横切る方が近道ではあるまいかと指ざした時、またパクストンはこう言いました。

これはもっともなことでした。で、私たちは教会のほうへ道をとリ、踵を返えして墓地の門をくぐりました。白状しますが、私はこの時、誰かわれわれの仕事を嗅ぎつけたような人間が、数人その地びたに腹んばいになっているような気がしたのでした。もしこれがまちがっていないとしたら、彼等の脇に立って、あたかも私たちの行動をジツと監視しているような人物に、彼等は気づいていた筈です。だが、彼等にはなんの素振りも認められませんでした。とはいうものの、よく観察して、ほかの場合は知らず、その時はそうだったと感じたのです。特に、墓地を通って、高い垣根にせばめられている谷底めいた道へ、神を念じながら抜け出た時、そうだったと感じたのです。

こうして三人は、ひろやかな野っ原へ出たのでしたが、私は、よし一番さきに出たとしても、垣根沿いに、もし誰かがうしろにいるなら目で見る事ができたでしょう。垣根の木戸を一つ二つ越えると、左方に曲る横道があつて、その道はあの塚の端にある高みへのぼるようになっていゝるのでした。

その高みへ近かづいた時、ロングと私は、妙なものを感じました。それは朦朧としたいくつかの人の姿―幽霊と呼ぶよりほかはないもの―で、私たちを待ち受けているらしくもあり、且つその一つはずっとハッキリした姿で、私たちについて来るらしいのでした。

このあいだ絶えず動揺していた。パクストンの様子は、充分描写することができないくらいです。彼は狩り立てられた獣の如く息を喘がしていました。彼の顔を見ることはできませんでしたが、いよいよ目的の場所に着いて、彼がどうやり遂げるかは、心配するに及びませんで

した。彼は王冠を埋め返えず仕事が、困難ではないと、いかにも確信しているらしかったのです。またそれは困難ではなかったのです。

まったく、私が見たこともないほどの突進のしかたで、彼は塚の側面にある、目ざす一点へ飛びかかり、そこへ穴をうがりました。たちまちのうちに彼のからだの大部分は穴にはいつて見えなくなりました。

私とロングは立ったまま、彼の外套とハンカチにくるんである王冠をもち、実際おそるおそるあたりを見まわしていました。あたりにはなにも認められませんでした。後方には暗い樅の木が、月空を黒く区切っていました。右手半マイルばかりかなたには、更に多くの樹々と教会堂の塔、左手の地平線には田舎家と風車、前方には死んだように静かな海、それと私たちの間には月光をうけて閃めく堀があり、そのわきの一軒の田舎家には、犬がかすかに吠えていました。満月は海

を越えて進みつつありました。私たちの頭上を蔽うている樅の茂りと前方の海とは、永遠のささやきをしていました。だが、このシーンと似たなかに、いつか逃げ出そうとする革紐にくくられた犬のような、なにか抑えつけられた敵意への鋭い辛辣な自覚が、私たちに非常に強くなりました。

パクストーンは穴から身を引き出して、うしろざま私たちの方へ片手を差し伸しました。

『それをください。』彼はささやきました。『それをほどいて。』私たちはハンカチを引きのけて、王冠を渡しました。彼がひっ掴んだ時、月光はそれをキラリとさしました。私はその金属の部分には触れませんでした。そしてそのため私は王冠がまったく同じものであると思ったのでした。

つづいてパクストーンは、穴から出て来て、もう傷のため血を出して

いる両手で、いそがしく土をすくい入れました。でも彼は私たちの手を借ろうとはしませんでした。こうして穴をわからないように元どおりにする仕事が、たしかに一番時間のかかった仕事でした。だがーどんなふうによったか知らないがー彼はこの仕事をみごとにやってのけたのでした。もうこれでいいというので、私たちはすぐさま引きかえすことにしました。

丘から二百ヤードばかり来た時、ロングはふと気がついたように、パクストンへ声をかけました。

『やあ、君はあすこへ外套を忘れたな。そいつはいかんよ。ねえ?』
そう聞けば私もたしかに見たのです。ー長い黒い外套が、トンネルのそばへ置いたままになっていたのを。

パクストンは、だが足をとめませんでした。彼はただ頭を振っただけで、腕にかけた外套をさしつけました。そして私たちが彼といっし

よになった時に、彼はべつになんでもないように、平然として言いしました。

『あすこにあつた外套は、私のじゃあなかつたのです。』
そして実際の話ですが、も一度私たちが振り返って見た時には、あの黒い外套はなくなっていました。

さて私たちは、道踏に出て足早やに帰途につきました。旅館に着いたのは、つい十二時前で、ロングと私は、ほんとに散歩にはもって来いの、美しい夜だったと、言いつくろいました。旅館の靴磨きは、私たちを迎えるために窓のところにいきました。私たちは旅館へはいつか時、彼の嫌味をなだめるように話しかけました。彼は玄関の戸をしめる前に、海岸のほうをもう一度ヂロヂロ見やっつて言いました。

『お客さん方は、多勢の人たちと、お出あいなさいませんでしたかね？』

『いいや、誰にも会やしなかったよ。ほんとうに。幽霊一人にだつてね。』

と、私が言いました。私はおぼえています。この私の言葉に、パクストンは変な顔をして私を見ました。

『私は誰かが、あなた方のうしろで駐車場の道に現われるのを見たと思いましたがね。』と靴磨きは言いました。『でも、あなた方は三人御いっしょだったので、そいつが悪者だとは思いませんでした。』
私はなんと答えていいかわかりませんでした。ロングはただ『おやすみ。』と言いました。そしてわれわれは、靴磨きに、灯火をみな消してしまつてベッドにはいるからと約束して、二階へあがつて行きました。

私たちの部屋へ帰ると、私たちはパクストンに、元気な考えを起させるよう、大いに努力しました。

『さあ、これで王冠はちゃんとお返えししたわけだ。』と、私たちは言いました。『もうあのことは気にしないがいいさ。』（この言葉に、彼は強くうなずきました）『だって事実王冠をそこねやしなかったのだからな。そして僕たちは、あの王冠に近かづくような向う見ずな人間には、決してこのことを漏らしてはならない。こう言っても、まだ君は気持ちがなおおらないのかね？僕は白状しようとは思わないが』と、私は言つて、『あの出かける途中、僕はすいぶん君の意見をーうん、なにかについて来られたことについての君の意見を、聞きたいと思つたのだよ。だが帰りには、あれは結局ついて来なかつたじゃないかね？どうだね？』

たしかに、ついては来なかつたのです。

『あなた方は、なにも気にかけることはないのです。』と、パクストンは言いました。『でも、私は許されはしません。あなた方が

言おうとしていられることは、よくわかっています。私はあさましい聖物^{サクリリッジ}窃取の罪を、まだ負わなけりやなんのです。教会で救って頂けるでしょう。ええ、罰を受けるのはこの肉体です。たしかに、今はあの人はそとで私を待ち構えているとは思いません。だが――』

プツリと彼は言葉を切りました。そして感謝するように、私たちへ振りかえりました。私たちはできるだけ早く、彼を押しなだめて去らしました。明日はぜひわれわれの居間で過ごすようにと強い、いっしよにゴルフをしようじゃないかと言いました。彼は、ゴルフはやれるが、どうも明日はその気になれまいと答えました。とにかく私たちは、彼に、ゆっくり眠って、明日の朝、われわれがゴルフをやっている間、私たちの部屋に來ているがいい、そして午後はみんなで散歩に出かけようと勧めました。彼はすなおにうなずいて、すべて低声^{こごえ}で応えました。――私たちが最もいいと考えていることには、どこまでも従おうと

していること。だが、まさに来らんとしているものは、避けることも軽くすることもできないと、もうすっかり覚悟しているということ。

なぜ私たちが、パクストンを、郷里に帰えし、兄弟その他の保護のもとに、彼の安全を計らなかつたのかと、問われる人もありません。が、事実、彼はそうした身寄りを一人も持っていなかつたのでした。

彼はこの町で一軒の割住宅フラットを持っていたのでしたが、近来スエーデンにしばらく移住しようと思っていたのでした。で、住宅を片づけ、荷物を船送りして、その出発前三三週間を、この旅館でブラブラ暮らしていたのでした。

とにかく私たちは今のところ眠むるが一番だと思いましたが―私としては充分眠むれませんでしたが―そして、翌朝の様子を見るつもりでした。

ロングも私も、その翌朝が、望み通りの美しい四月の朝とは、はな

はだちがつていることを感じました。そして朝食の時に会ったパクス
トンも、またすっかりちがつているように見えました。

『昨夜は、いつになく、かなり眠れた晩というに近かったです。』
これが彼の言葉でした。しかし彼は私たちが予定したようにしよう
としていました。ほとんど朝中は私たちの部屋にいて、それからいつ
しよに外出することにしていました。

私とロングはゴルフ・リンクへ行きました。そこで連中に会い午前
を共にゴルフをやり、おそくなって帰ることにならないよう、早目に
ランチ〔朝食と昼飯の間の食事。〕にしました。依然として、死の罫
がパクスTONを追っているのです。

どうしたらそれが防げたか、私にはわかりません。私は、彼がなん
とかして私たちの努力に、ついて来てくれるだろうと思いました。だ
が、とうとうこんな事になったのです。――

— 私たちは、ゴルフから帰るなり、まっすぐ部屋へ行きました。そこでパクストンは、いかにも安らかに本を読んでいました。

『じき散歩に出るが、支度はいいかね?』と、ロングが声をかけました。『いいかね?三十分以内にね。』

『いいですとも。』と、彼は答えました。で、私は、まず二人が着物をぬぎ、たぶん入浴もし、それから三十分以内に彼を呼ぶと言って置きました。

私がまず入浴して、それから寢室のベッドにごろりとなりました。十分ばかり眠りました。ロングが入浴して居間へ行ったのと、私が起きて居間に行ったのとは同時でした。ところが、パクストンはそこにいないで、本だけ残っていました。彼の部屋へ行ってみたが、いませんでした。階下したのどの部屋にもいませんでした。

二人は大声で彼を呼びました。女中が出て来ました。

『おや、あなた方はもうお出ましになったと思っていきましたよ。もう一人のお客さんはお出ましになりましたよ。あの方はあなた方が、往来からお呼びになる声を聞いて、急いで走って出られたのです。わたしは喫茶室からのぞいて見たのですが、あなた方の姿は見かけなかったのです。でも、もう一人のお客さんは、あの道を下の海岸の方へ走っていかれたのでした。』

一語も応えないで、私たちはその道を駆け出しました。―その道は、昨夜遠征した道とは反対の方向でした。まだ四時にはなっていないで、今までのように晴れてはいなかったが、それでも日はあかく、事実なにも不安な筈はありませんでした。人はあたりをあるいているし、たしかに誰だつて、これと危害を受けるようなことは、あり得なかったのです。

でも、われわれが駆け出した時、われわれの顔色が女中を驚かした

にちがいはありません。彼女は入口の段まで出て来て、指ざしながら言いました。

『そうです。その道をおいでになりましたよ。』

私たちは小石の土手のてっぺんまで駆けのぼり、立ちどまりました。そこから道が分れていました。一つは海岸の家続きを過ぎ、一つは磯の低地の砂づたいで、ちようど汐が引いていたため、すっかり広くなっていました。ともあれ私たちは、二つの道の間の小石の上を進み、この二つの道が二つながら見わたせるようにしました。どうにもひどいところでした。そこで砂づたいの方へ出ました。というのは、その道が一番淋しく、本街道からは目につかないで、誰かが危害を蒙り得るような道だったからです。

ロングは或る遠い彼方に、パクストンの姿を認めたと言いました。まるで自分の前にいる人々に、合図でもしたいと思っているように、

走りながらステッキを振っていたと言うのです。私はどうも信じられませんが、海の霧の一部が、非常にはやい速度で襲って来ました。そこに誰だかいたようです。私にはこれだけしか言えません。ふと、そのあたりの砂の上に、靴をはいて走ったらしい誰かの足跡のあるのを見ました。そしてその足跡の前にもほかの足跡がありました。これは靴をはいていない足跡で、ところどころ、靴がその中に踏み込まれ、その足跡を踏みにじっているのです。

おお、無論それは聞く人の想像におまかせする、唯一の私の言葉なのです。ロングはヘトヘトで気力もなくなり、私たち二人は足跡の見取図をとったり型をとったりする時間も手段も持ちませんでした。そして次の出汐が来て、すべてのものを洗い去ったのでした。二人にできたことは、急いで進みながら、その足跡を拾うだけのことでした。だが足跡はまだところどころに現われていました。そして私たちが見

た足跡は、たしかにすべて裸足でした。その一つは肉よりも、ずっと骨のきわだつて見える足跡でした。

パクストンのつもりでは、彼が探し求めていた友人たち「すなわち私たち」だと思つて、あとを追つかけた―それは私たちから言えば、甚だ恐怖すべきような或るものを、追つかけたのでしよう。私たちがどんなものを想像したか、―彼が追つかけているものが、突然立ちどまつて、どう彼へ振り向いて、絶えず濃くなる霧の中で、はじめは半ば姿を見せて、どんな顔をしたか―は、おわかりでしょう。

そして私は走りながら、このあわれにも不幸なパクストンが、どうしてほかのものを私たちだと思つたのかと怪しみましたが、その時、私は、彼が、『あいつはあなた方の目をくらます力をもっていますよ。』といった言葉を、思い起しました。そしてまた、この結末はどうなるだろうか、心配しました。それは、私が、今やこ

の結末を防ぎ得るといふ希望をもたなかつたからです。そして――私たちが霧の中に駆けこんだ時、私の脳裡にきらめいた凄惨な恐ろしい考えは、お話しする必要はありません。

太陽はまだ空に照り輝やき、そして私たちあたりになにもものをも見なかつたのです。それだけに却って薄気味がわるかつたのでした。私たちは今や家々を過ぎ、家々と古ぼけた円砲塔の間の、細道に達しました。塔を過ぎると、そのさきは長い間、石ころのほかにはなにもない――家も、人も見えない。ただ右手は川、左手は海で、岩がちの陸の出っ鼻があるだけです。それはあなたも知ってるでしょう。

しかし、その出っ鼻のちようど前、円砲塔のそばに、海に接近して古い砲台があることは、おぼえておられるでしょう。今でもあそこには、ただコンクリートの台座がすこし残っているだけだと思ふ。あとはすっかり波に洗い去られてしまったものの、その頃は、場所こそ一つの

廃趾だが、まだかなり残っていました。で、私たちはそこへ達するなり、できるだけ敏速に台座のてっぺんへ、はいのぼりました。そこで息を入れて、もしうまく霧が晴れば、前方の小石原を見わたすつもりだったのです。一分くらい休まなければならぬ。すくなくとも一マイル走ったのですから。

私たちの前方には、まるでなに一つ見えませんでした。で、二人はうなずき合って、台座から降り、しかたなくまた駆け出そうとしました。ちょうどその時です。私たちは一つの笑いともいいいいような声を聞きました。その笑いは呼吸のない、肺のない笑いとも言った。わかってもらえるとも思うが、聞いたことのない人には、理解できません。その声は下の方から起って、霧の中へそれてしまいました。それでおしまいです。私たちが台座の壁へ、身を乗り出してみると、パクストンは、下の方に倒れていました。

彼が死んでいたことは、言うにも及びますまい。彼の足跡は、彼が砲台の脇を走り、その角を急に曲がろうとした事を示していました。そして、すこし疑わしいが、彼は、そこに待ち構えていた誰かの、ひろげた両腕の中へまっしぐらに飛びこんだにちがいないのでした。彼の口には、砂や小石が一杯に押しこまれており、歯と頤は、めちやめちやに碎かれています。私は彼の顔を二度見る気にはなれませんでした。

屍体をどうにかしなければと、二人が砲台から這い降りかけた、ちょうどその瞬間に、私たちは叫び声を聞きました。一人の男が円砲塔の土手を駆け降りて来るところでした。彼はここに駐在している番人で、彼の鋭い老眼は、霧越しにも、なにか変事があつたことを見抜いたのでした。彼は倒れているパクストンを見、そのつぎの瞬間、私たちを見て、駆けつけたのでしたが―これが幸いで、もしそうでなかつ

たら、私たちはこの恐ろしい事件に関するの嫌疑を、ほとんどまぬかれることはできなかつたでしょう。私たちは彼に、パクストンを襲つた者を、目撃しはしなかつたかと訊きました。彼はどうもおぼえがないと応えました。

私たちは彼に頼んで、手伝ってくれる者呼びにやりました。そして担架が来るまで屍体のそばに立っていました。そのあいだに、私たちは、パクストンがどうしてここへ来たかと、砲台の壁の下の、せまい砂地の縁ふちを伝ってみました。そのさきは小石道なので、加害者がどこへ行ってしまったか、残念ながらわかりませんでした。

検屍官の取調べに、なんと言ったらいいか？そこで、その時に、王冠の秘密を、いろんな新聞に書きたてられるままにしてはいけない、これがわれわれの義務だと思いました。私はこの話を、どれほど深く言つたか、わかりません。だが、この点が大事なのです―すなわち、

私たちがパクストーンと知己になったのは、ついこの事件の一日前であること、そして、彼がウィリアム・アージャーと呼ばれた人物の手中に、なにか或る危険の懸念のもとに置かれていると、われわれに打ちあけたこと。また、われわれが磯づたいにパクストーンを追っかけた時、彼の足跡のほかに、他の数人の足跡を見たこと。しかし無論、取調べの時には、すべて砂上から消え去っていたこと。

誰一人、幸いにも、この地方に住んでいる、いかなるウィリアム・アージャーという名の人も知っていませんでした。円砲塔の番人の証言で、私たち二人はすべての嫌疑からのがれました。陪審官の評決では、或る人物あるいは知られざる人物によって、執拗な殺人が行われたのだということになりました。これが一切の結末でした。

パクストーンは、こんなわけで、すべての取調べには無関係ということになり、したがって所謂“通行止め”で終わりました。そして私はそ

れから、もう二度とシーバロウには、行きもせず、近か寄りもしない
のでした。